

朱熹の蘇学批判：序説

合山, 究
岐阜大学教育学部：講師

<https://doi.org/10.15017/9818>

出版情報：中国文学論集. 3, pp.25-36, 1972-05-01. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

朱熹の蘇学批判

一序説一

合山 究

新儒学がはなやかに興起した北宋時代は、あまたの士大夫がそれぞれに一家の学をかまえて侃々諤々の抗争を繰返したが、なかんずく王氏の学問（新学）、蘇氏の学問（蜀学）、程氏の学問（道学）が最も有勢をほこり、「荊公は経術を以てし、東坡は議論を以てし、程氏は性理を以てし、三者要す各々門戸を立てて、相踏襲せず」（陳善「捫虱新語」巻五）といわれるように、彼らは多くの学者を傘下に糾合して、特に峻烈な葛藤を繰広げた。この三派による政治的學術的相剋は、領袖である彼らの死後も永く尾を引き、後世に相当深刻な影響を及ぼした。その概略を手短かに述べると、北宋の熙寧元豊年間（一〇六八―一〇八五）は、新法党が政権を握り、王安石の学問が一世を風靡したのに対して、旧法党系の蘇氏や程氏はともに野にあって抵抗を余儀なくされた。次の元祐年間（一〇八六―一〇九三）は、旧法党の政権奪還によって、蘇氏と程氏が陽のあたる場所まで激しく闘い、所謂「洛蜀の党争」とよばれる深刻な角逐を生じたのに対して、

王安石の一派はひたすら鳴りをひそめていた。しかし次の紹聖年間以後、北宋が滅亡するまでの二十数年間は、またもや王氏の学問を継承する新法党が政権をとり、蘇氏と程氏の学問は大弾圧を被むるのである。ところが、一一二六年に靖康の変が起り、金のために中原を失った宋が南渡すると、国家を敗北に導いたという理由によって、新法党が勢力を失墜し、この政治的勢力の瓦解とともに王氏の学問は昔日の盛行をみる事ができなくなり、かわって蘇学と程学が再び振いたつのである。

このように北宋三派の激しい興亡の歴史をへて、南宋中期、程学の継承者である朱熹（一一三〇―一二〇〇）が、純粹儒学の復興に情熱を燃やして思想史の檢舞台に登場するのであるが、このころは、上述のごとく、なお蘇学と程学が一般に流行し、互いに勢力争いにしをげずついていたわけである。清の陳清瀾は、「朱子が出て蘇子瞻を始めとする有力な宋代諸学者の仏旨による経解がみな廃絶した」（『学部通辯』終編下）といっているが、まだその当時は、後世のごとく程朱学が思想界に君臨するということとはもとより、士大夫の学問として道学の優位が

確立するかどうかさえも、なお渾沌として予断を許さないものがあった。

従来三蘇の学問は、彼らの余りに高い文名と反道学的立場からして、思想史の範疇に入らざる人物として敬遠され、その研究は比較的等閑に付されてきたが、もともと蘇軾（一〇三六—一〇九一）らは、当時の文人のつねとして、經典の注釈にも意を用い、互いに協力して重要な古典にはおおむね注釈を施し、思想上にも特異な成果をあげている。蘇軾は父蘇洵（一〇〇九—一〇六六）が手がけた易の注釈を完成させて易伝九巻を作った外、書伝二十巻、論語說四巻を作り、弟蘇轍（一〇三九—一一二二）は詩伝十九巻、春秋集伝十二巻、老子解二巻、古史六十巻、孟子解一巻および伝燈録解を作った。これらの思想的著作が、膨大な議論文章の根幹となつて、のちに程朱学に対抗する学問的思想的な一大勢力を形造り、南宋中期には、文学界のみならず思想界にも進出してその覇権を握ろうとしたのである。これに對して、そのころ道学の旗幟を高く掲げて立上つた思想家朱熹は、瘦々峻烈な蘇学批判を行い、その打倒に懸命の努力を傾けたのであるが、そこに至るまでの情況について、北宋末期に遡つて蘇学を中心に更に詳細に見てゆくことにしよう。

徽宗皇帝の即位によつて政權を掌握した新法党は、蘇軾没後の翌年、崇寧元年（一一二二）には、曾布・蔡京らが徽宗を動かして司馬光以下、旧法党人百二十名を姦党とよび御書刻石して端礼門に置き、翌二年には各地に元祐姦党碑を立て、元祐党人の子弟と皇族との婚姻を禁じ、元祐の學術政事を伝授するものをきびしく処罰し、また翌三年には元祐元符の姦党三百九人の

名氏を蔡京が大碑に書して天下に頒布した。これが所謂「元祐の學術政事の禁」であり、荒木敏一氏は、「元祐の學術は言う迄もなく詩文中心である。その詩文を『繡紳の徒が痒序の間に私かに相もに伝習する』ことを禁ずるものであるが、それには『涑水の通鑑、蘇黃の酬唱』等を廢絶せしめねばならぬ」とし、彼等の文集の印造を禁止する等のことを含む。即ち徽宗は舉人にして、元祐の學術を伝習する者に対し、違制を以て論ずることとし、朝堂に掲榜して御史台をして弾劾せしめることにし（政和元年）、また福建路にて蘇軾・司馬光の文集が印造されると聞くと、詔してその版を破毀せしめることを命じた（宣和五年）¹⁾。といつてゐる。かくして北宋末期の二十数年間、旧法党人の學術は、このような苛酷な弾圧にさらされたのである。

もちろんこの間、蘇軾らの詩文を学ぶものが、かかる政治的圧迫に完全に屈してゐたわけではない。多くの逸話に見られるように、ひそかに伝習するものは迹をたたなかつたが、とにかくこのような學術の禁によつて、崇寧大觀以後は、詩賦は殆ど振わず、遂に政和年間には大臣にして詩を作ることを能わざる者を出した（「避暑録話」卷下）と伝えられてゐるほどであり、蘇学にとつて非常な災難の時期であつたことは言うまでもない。蘇軾の思想的著述である書伝・易伝・論語說も、かつて彼が黃州に流された時に一応の完成をみていたが、死ぬまでずっと修正を加へてゐるうちに、このような党禁に出あつて、遂に殆ど出版されることなく一般の人の目にとまらないまま二十数年間うずもれることになつたのである。また蘇轍の詩伝・春秋集伝・老子解・古史・伝燈録解もやはり北宋明代には表だつて陽の目

を見ることなく、殆ど印行されなかつたようである。これらのうち僅かに蘇軾の「易伝」が、実名をあかさず、比陵（常州）で死んだ彼にことよせて「比陵先生易伝」として出版され、一時狭い範囲に流布した事実はあるものの、これらもほんの一部の人々の目にとまったに過ぎないと思われる。

二

さて南宋に入ると、この形成は逆転して旧法党が再び抬頭し、靖康元年（一一二六）正月より祖宗の法によって政治を行なうことを欽宗が詔し、金軍が開封城を攻圍中の同年二月には、司馬光らに追贈して元祐党籍學術の禁を除き、旧法党人を起用することになった。科擧にも詩賦を用い、春秋科を復活し、王安石の字説を禁じた。ここに至って王氏の学問は一般の人氣を失い、その隆生に終止符を打つたのである。そしてその後南宋の基礎が定まる高宗治政の三十数年間に、宋金の和平は幾度か破れたが、これも秦檜らの議によつて回復保持され、かなり平和が続いたために、學術文章も漸次生氣をとりもどし、とりわけ蘇氏の文章は一般の人氣をさらった。それは「建炎以來、蘇氏の文章を尚び、學者は翕然として之に従う。而して蜀士尤も盛んなり。また語ありて曰く、蘇文に熟すれば羊肉を喫わん。蘇文に生なかなれば菜羹を喫わん」（『老学庵筆記』卷八）という陸游の言葉などによつて十分窺知できる。また南渡後まもなく蘇氏の子孫が朝廷に拔擢されたり、黄秦晁張などの門下士が追贈を受けたりするなど種々の恩典も被つてゐる。

ところで、元祐學術の禁によつて、北宋末期に殆ど陽の目を

みなかつた蘇軾兄弟の思想的著作は、南宋に入るやたちまち一般人士の注目を集め、大いに脚光を浴びるところとなつた。彼らは生前これらの経解に相当自信をもつており、後生に裨益することのあるのを期待してゐたが、その生前の願いがここになえられ、東坡文學の盛行と呼応して、蘇学の人氣は一般に広く深く浸透していった。南宋初代の天子高宗の後をうけて、二代目の孝宗が即位するころには、すでに文人としての三蘇のみならず、思想家としての彼らの存在が大きくクローズアップされ、このような著作が所謂蘇学のバックボーンとなつて、いまや思想界をも蹂躪せんとする勢いをしめていたのである。

一方程氏の学問も、南宋に入つて急に盛んになり、最初の天子高宗は程頤の学説をよろこび、科擧にも程頤の学問（道学）が尊ばれたようであり、多少の曲折はありながらも蘇学に劣らぬ隆盛を極めていたことは、「道命録」・「宋史紀事本末」などの記事によつて窺われるが、何分にもこのとき南宋第二代の天子で、蘇軾の文学に私淑すること並々ならぬ孝宗が即位したため、形勢が逆転し、蘇学の勢いが程学を凌駕し、思想界においてもこれを圧倒する様相を呈してきたのである。孝宗は皇太子のころから蘇軾の文集を愛読し、乾道九年には自ら彼の文集に序贊を書いて「太師」の位を追贈し、淳熙三年には蘇轍に「文定」の諡を賜わつており、また淳熙九年に朱熹が唐仲友の悪事を弾劾したとき、唐仲友は天子の好む蘇学で論陣を張つたために遂にその罪をゆるめられたという逸話もある。このような天子の意向が、天下の學術の趨勢に甚大な影響を与えることは言うまでもなく、「乾道淳熙の交には蘇氏の文章が大いに喧伝さ

れ、天下の挙士がみな靡然としてこれに倣い、その辞章雅正を尊びて、世に乾淳体と称せられた」といわれ、またこのころ「東坡詩への注釈家が夥しく現われて、唐代初頭における『文選』の注釈のように、詩の注釈史上第二の発展期ともいふべき状態を現出した」ともいわれるように、まさにこの時孝宗皇帝の大いなる庇護の下に蘇学の流行は絶頂を極めつつあったのである。孝宗の即位当初、朱熹が最初の上奏文をたてまつり、次のように言っているもの宜なるかなと思われる。

臣愚伏して願う、陛下は旧し習んだ無用浮華の文を捐去り、是に似て非なる邪説な説を攘斥け、少しも聖意をこの遺経（程学）に留め、眞儒のその旨を深く明めた者を延訪せ、これを左右におきて以て顧問に備え、研究拡充して、至精至一の（境）地を務げ、天下国家の治まる所以のものは、ここ（無用浮華の文や是に似て非なる邪説）に出でざるを知りたまわんことを。（朱子文集卷十一、壬午応詔封事）

また引続いて翌年の隆興元年にも上奏文をたてまつり、次のように言っている。

おもうに、前日進講の臣は程式に限り、陛下に（上）聞する所以のもの、詞章記誦の習いにすぎず。而して陛下のここに進む所以のものを求むるもまた、これを老子釈氏の書にとるにすぎず。是以、生知の性、高世の行ありといえども、いまだかつて事に隨いて以て理を見ざるなり。故に天下の理、いまだ察せざる所多し。（文集卷十三、癸未垂拱奏劄一）

程頤の学統を引く胡憲（籍溪）・劉勉之（白水）・劉子翬（屏山）や李侗（延平）などを師とし、鬱勃たる道学復興の念と、道德を一新し国力の充実をはかり、中原奪還という民族の使命感を

抱いた三十四才の朱熹にとつて、既成の有力な学問体系として彼の前に大きくたちはだかつて人心を擯にしている蘇学こそ、まず最初に打倒しなければならぬ仇敵に思われたであろうし、しかも新皇帝の蘇学愛護の性向はまことに憂慮すべきものに感ぜられたに相違ない。従つて彼の蘇学への攻撃は、後述するように、孝宗皇帝在位の前半である乾道年間（一一六五—一一七三）に集中的にあらわれていることに、まず注目したいと思う。その間の事情を、羅大経が適切に伝えている。

孝宗最も大蘇の文を重んじ、御ら序贊を製し、特に太師を贈る。學者翕然として誦説す。所謂へんごとに元祐の学を伝え、家ごとに眉山の書ありとは、蓋し実を紀すなり。文公（朱熹）毎にその徒という、蘇氏の学は人の心術を壞る、学校尤も宜しく禁絶すべしと。楚辭後語を編むに、坡公の諸賦は皆取らず。惟だ胡麻賦のみを取むるは、その文の橋頌に類するを以てなり。名臣言行録を編むに、坡公の議論において、取る所甚だ少なし。（鶴林玉露卷九）

かくして嘗つて北宋の元祐年間に、程頤と蘇軾がわたりあった〈洛蜀の党議〉は、文学派官僚と道学派官僚の感情的氣質的対立以上に出なかつたが、約八十年ののち、再び彼らの学術を信奉する人々、とくに朱熹をめぐる人々によつて、今度はかなり思想的対立の様相を呈しながら、またしても風雲をはらむ気配が濃厚になったのである。

三

朱熹の乾道年間における蘇学批判の主な資料としては、蘇氏などの思想の邪正を逐条批判した「雜学弁」や、汪応辰・呂祖

謙・程洵などと数次にわたつて応酬した蘇学論争の書簡がある。

「雑学弁」は、乾道二年（一一六六）、三十七才の時に、蘇軾の易伝十九条、蘇轍の老子解十四条、張九成の中庸解五十二条、呂本中の大学解四条をとりあげて論難批判したものである。つまりこれら雑学の学問と朱熹の唱える学問との根本的に相違する条項に対して、その思想の核心に鋭い攻撃を加え、彼らの思想構造の誤りを突いたわけである。先輩の何鏞がこれに跋文を書き、異端の書を縷々述べたあと、「新安の朱元晦は、孟子の心をもつて心となし、大いに吾道の不明を懼れ、流俗の譏議を顧みなく、嘗つてその書に即してその疼痛を破り、その膏盲を鍼き、読者をして曉然として異端の非たりて聖言の正たるを知らしむ。」（文集卷七十一）といっているが、彼が蘇学を始めとする雑学に対して、このように容赦のない攻撃の矢を放ち真向うから対決したことは、このころ彼の思惟方法がすでにほぼ定立し、自己の学問に相当自信をもつてきたことを示すものであり、その後まっしぐらに道統の樹立と自己の学問大系の確立へと疾駆する重要な足がかりとなつたのである。とくに蘇学は朱熹自身も「雑学弁」の序でいうように、容易に論破できない巧妙な理論と人をひきつける魅力をもっているのであるが、少くともこれを論理的に打ち破るかあるいは批判しうるだけの思惟大系を構築しえた彼は、それ以後、蘇学に惑わされている多くの人々に対して、あくなき説得工作を展開し、学説の拡張をはかるのである。朱子学と蘇学との思想構造上の相違点を明瞭にうきばりした「雑学弁」については、続稿において詳述することとし、まず彼の往復書簡を通して蘇学批判の実態を明らか

にしてみたい。

朱熹が蘇学批判の刃を最初に突きつけたのは、先輩の汪応辰（字聖錫、号文定）（一一八一—一二七六）である。汪応辰は朱熹より十二年長であり、紹興五年の科挙に十八才で状元及第し、後に敷文閣学士・四川制置使・知成都府になつた人であり、少くして喻樗・張九成・呂本中・胡安国などに従学し、後年呉帝・王十朋・陳良翰などの諫官の間にあつて最も硬骨漢と称せられた。政治的地位も文人としての名声も当時トップクラスの人物であり、また朱熹とは親戚（従表叔）の間柄であつた。朱熹と汪応辰との交遊がはつきりわかるのは、隆興元年汪応辰が敷文閣体制・知福州として福建省にやつてきた時以来であり、応辰はこの時「朱熹を挙げて自らに代うる」状を朝廷にたてまつっている。応辰は福建に二年いて、蘇学の盛んな四川省に転任したが、依然として福建の朱熹と四川の応辰の間には、頻りに書簡の往復があり、この時（乾道四・五年ごろ）に蘇学に対する意見の交換が両者の間に起つたのである。汪応辰は、当時成都で蘇軾の書を石に刻して「成都西楼帖」を作るなど相当その学風に耽つており、また当時の文人のつねとして仏教にもかなり興味を示しているが、そのために朱熹の激烈な蘇学批判を浴び、その矛先をかかわすのにたじたじとなりながら、消極的に蘇学の弁護にまわっている。朱熹にしてみれば、彼の遠縁にあたり、名の知れた先輩である汪応辰を自己の陣営に引き込もうと必死になるのは無理もないことである。現存する資料によれば、それは朱熹に四通（文集卷三十「答汪尚書」に三通、同卷二四に一通）、

汪応辰に二通（文定集卷十五「与朱元晦」）みられる。甚だ長文なので部分的にしか引用できないが、それによると朱熹は、汪応辰が「両蘇の学は、王氏と科を同じうすべからず」、「歐陽・司馬は蘇氏に同じ」といったのに答えて、歐陽修・司馬光は儒者の伝統を失なつてはいないが、王氏・蘇氏は仏老を以て聖人となしており、ともに純儒とはいえない。のみならず王氏の学問が、今日勢力を殆ど失墜したのに比して、蘇氏の学問はいままさに隆盛を極めており、その害毒は王氏以上のものがあると、次のごとくいう。

蘇氏の言のごとくに至つては、高きものは有無に出入して義理を曲成め、下なるものは利害を指陳て人情に切近る。その智識才弁、謀為氣概は、また以て震耀してこれを張皇げるに足り、聴く者をして欣然として倦むを知らざらしむるは、王氏の比にあらざるなり。然れども道学を語れば則ち大本に迷ひ、事実を論ずれば則ち權謀を尚び、浮華を銜ひ、本実を忘れ、通達を貴び、名檢を賤しむ。これその天理を害い人心を乱し、道術を妨げ、風教を敗るることにおいて、またあに尽く王氏の下に出らんや。ただその身とその徒と、皆甚だしくは時に志を得ずして、利勢の以てこれを輔くるなし。故に、その説行わると雖も、甚だ久しかる能わず。およそこの患害について、人はいまだ尽くは見ざるなり。故に諸老先生置てて論ぜざる得にす。それをして当世に行なうも、また王氏の盛のごとくならしむれば、その禍を為すは、ただに王氏のみならず。名教を主とる者は、亦た契然して言なきを得ざるなり。

また、蘇氏の人物を論じて、次のようにいふ。

蘇氏のごときは則ちその身を律することすでに荊公の嚴なるにしかず。

その術たる、要すいまだ功利を忘れず。しかも詭秘は、これに過る。その徒たとえは秦觀・李廌の流は、皆浮誕佻軽にして、士類は齒せず。相ともに縦横・拜闕（兵家）の辨を扇りて以てその説を持し、而して漠然として礼儀廉恥の何物たるかを知らず。その勢利のいまだよく以て人を動かさずと雖も、世の放縱を樂しみ拘檢を惡む者は、すでに紛然としてこれに向く。それ（蘇氏）をして志を得せしむれば、則ちおよそ蘇京の為す所をば、いまだ必ずしも身ら之を為さずんばあらざるなり。世（の人は）徒らにそのすでに然るものによりて之を論ず。是以、蘇氏はなお近世の名卿の列に在るを得て、君子の人の美を成すを樂しむ者は、またいまだ形れざるの禍を逆さぐりて以て譏貶を加うるを欲せず。道学の邪正の際を論ずるに至りては、則ちその弁は豪鷹の間に在るものあり。假借さんと欲すと雖も私するあたわざるなり。今乃ち専ら王氏を貶して二蘇を曲賞とす。道術の明らかならざる所以、異端のますます熾なる所以は、實にここによる。

また汪応辰が蘇軾を弁護して、東坡は初め仏教を聞く目的をもつていたが、後に仏教の教への広大無辺なのと仏僧の弁舌さわやかなのに魅せられてしまった。しかしなお仏教には十分精通しておらず、智慮言語の間に滞り、仏典を儒教の教理で強引に解釈している。また蘇轍は「伝燈録解」や「老子解」を作り、三教会一をはかつているが、これらはみな習氣の弊というべきもので、もともと邪心はないのだから、道を知らないとは言えるかもしれないが、王氏と同じく貶斥するのはどうだろうか、と述べたところ、朱熹はまた激越な調子でこれに弁駁を加え、次のごとくいう。

そもそも（蘇軾）の始め禪学を聞くや、豈に能く天人の蘊を明ら

かにし、性命みよごとの原を推して以てそ(禪)の荒唐浮虚の説を破りて、これを正に反さんや。たとえ「大悲閣中和院記」の属は、ただ彼の祖を掠めて以てその精を角し、彼の外に擲て以てその内を攻むるのみ。これ乃ち子弟を率いて以て父母を攻め、技業を信じて本根を毀うなり。また安んぞこれがために詘らざるを得んや。近世の釈氏を攻める者、たとえば韓・歐・孫・石の正すらも、龜山はなお以てへ一杯の水もて、一車薪の火を救う(焼け石に水)と為せり。況んや蘇氏の邪を以て邪を攻むるがときは、これ繩を束ねて膏を灌ぎ(これに火をつけ)往きてこれに赴むなり。ただ身を燻して而る後やむのみ。

これに続けて、

熹窃かに謂へらく、学は道を知るを以て本と為す。道を知れば則ち学は純にして心は正しく、行事に現われ、言語に発す。また往くとしてその正を得ざるなし。王氏のごときは、その始めて学ぶや、蓋し揚(朱)韓(非)を凌跨ぎ、迹を顔(回)孟(子)に掩ばんとす。初めより亦た豈に遽かに邪心あらんや。特に道を知る能わざるを以ての故に、その学は純ならずして、心を設け事を造い、遂に邪に流入し、また自ら以て是となし、大いに穿鑿附会をなして以てこれを文る。これその重く罪を聖人の門に得る所以なり。蘇氏の学は、王氏と同じからざるものあるがごとしと雖も、然れどもその道を知らずして自ら以て是となさば則ち(蘇氏)と均し。学は道を知らず、その心は固より則に取て以て正となすところなし。また自ら以て是となしてこれを肆言す。その王氏たらざるものは、特に天下いまだその禍を被らざるのみ。その穿鑿附会の巧みさは、たとえ米教に称う所の「成佛を論じ」、「老子を説く」のたぐいにおいて、蓋し王氏の及ぶところにあらず。その心の不正は、乃ち「湯武篡弑す」と謂い、苟或を盛んにほめて以て聖

人の徒となすに至る。およそかくのごとき類、皆その私邪を逞しゅうし、復た忌憚することなきは、王氏の下にあらざるなり。

更にまた汪応辰が、なるほど貴説のように蘇氏の学問は欠点が多い。しかし今世の人が盛んにこれを誦習しているのは、ただ文章の妙を学んでいるのであって、初めからこれによって道を求めているのではない。だからその欠点をあげつらうのはどうだろうか。たとえば蜀の士大夫は殆ど三蘇を師と仰いでいるが、やはりただ文章の作り方を学んでいるだけであり、窮経攷古の学問は、往々疎略にしているが如何?と質ねたのに対して、朱熹はこのような学道と学文とを分離する考え方に強く反対して、次のようにいつている。

それ学者の道を求むるは、固より蘇氏の文においてせず。然れども、すでにその文を取れば、則ち文の述ぶるところ、邪あり正あり是あり非あり。これまた皆道あり。固より道を求むる者の講せざるべからざるところなり。その非を講去じて以てその是を存すれば、則ち道は固よりここにありて、而して何の不可かこれあらん。もしただその文のみ取りてまたその理の是非を講せざれば、則ちこれ道は自ら道にして、文は自ら文なり。道の外に物あれば、固より以て道となすに足らず。かつ文ありて理なきは、また安んぞ以て文と為すに足らんや。蓋し道は適くとして存せざるなきものなり。故に文に即して以て道を講ずれば、則ち文と道とは両ながら得て、一以てこれを貫く。しからざれば、則ちまた將に両ながらこれを失わんとす。中に主なく、外に拵ぶなければ、その浮誇險詖の入るところなりて、その心思を乱さざるものは幾ど稀なり。いわんや彼(蘇氏)の自任する所以のものは、ただ文章を曰うのみにあらず。すでに以てその得失を考うるなくんば、則ちそ

れ肆然に道德を天下に談ず。それまた孰れかよくこれを擊がん。

さて次に朱熹が程洵(一一三五一—一九六)字は允夫にあてた書簡中にもみられる蘇学批判をとりあげることによしよう。程洵は、朱熹よりも五歳年少で四才早く死んでいるが、彼もまた朱熹の親戚(中表)であった。程洵は自ら「間に独り眉山の蘇氏・河南の程氏の書を取りて之を讀めば、則ち心開け目明け、聳然として敬を増し、恍然として數先生者と巻中に対して、親しく警歎を聞くがごとし。」(尊徳性齋集巻二「上周丞相書」というように、長年角逐のあつた「蘇程(の学)を合して一家の心となさん」としたのである。周必大の書いた彼の文集の序にも「酷く眉山の文を嗜み、《三蘇紀年》十巻をつくり、間に以て子に示す。その蘇氏父子の出處、詩文の先後、前輩議論の及ぶ所において、編纂ほぼ尽く。」といわれるように、極めて蘇学に執心していたことがわかる。彼は朱熹とのたびたびの往復書簡によつて、ついに朱熹に屈服させられて、表面的には蘇学への愛好を断ちきり、道学へ転向したかのごとく振舞いながらも、実は蘇学への愛好やみがたく、ひそかに「三蘇紀年十巻」を書き、これを周必大には見せたが、朱熹には叱られるのを恐れて終に生前見せぬまま他界した。彼の死後に及んで、朱熹は、程洵が自分に表面的には服従しながらも、陰でひそかに「三蘇紀年」を書いていたことを知つて慨嘆したが、今は亡き愛弟子程洵のために、その思想的な誤りを訂正した「読蘇氏紀年」(文集巻七十)を書いてやつたのである。程頤の書いた彼の伝によると、「先生(程洵)の学、初め蘇氏の議論を敬慕し、復た程蘇の道は同じと謂う。蓋し

この時に當りて世の学士大夫は惟だ蘇学のみをこれ尊ぶなり。文公これと辨難すること數千百言、卒竟に語孟濂洛の書に従事し、剖析推明す。文公亟しば之を称許す。」(尊徳性齋集補遺「程克庵伝」といわれており、朱熹も彼を屈服させるのにかかり手こずつた様子を窺うことができるが、彼にとつては、親戚の優秀な後輩であり、しかも相當に文才を有する程洵を、屈服させずんばやまずと思つたに相違ない。時に厳しく高圧的に、時に優しく教誨的に、程洵に対して、蘇学崇拜をかなぐりすてて純粹に聖賢の道に動しむように、現存する資料によると四回にわたつて説得している。その内容から推測すると、おおむね乾道四年前後のものであるとみられる。程洵の「尊徳性齋集」には、朱熹の蘇学批判に対する返書は残っていないが、朱熹の程洵あての書簡や「読蘇氏紀年」によつて、彼の蘇学に対する態度を十分に知ることができるといふことができる。これも甚だ長文なので、その一部分しか引用できないが、

蘇黃門はこれを近世の名卿といへば則ち可なり。前書に顔子を以て之に方ぶ。僕論ぜざるを得ず。いまここに論ずるところもまた以て行之事法るべしとなす。(然れども)本朝は人物最も盛んにして、行事法るべきも甚だ衆し。ただに蘇公のみならず。大抵学者は道を知るを貴ぶ。蘇公は早く蘇張の緒餘を拾ひ、晩に仏老の糟粕に酔う、これを道を知るといふは、可なるか。古史中に、黄帝・堯舜・老聃の属を論ずるも、皆理に中らず。未だ概舉すに易からず。ただその弁は以て之を文るに足る。世の学者、理を窮むること深からず。因つて爲に眩まされるのみ。僕、數年前、またかつて焉にまどう。近歲始めてその繆を覚る。

來書に謂う、薫の言は、乃ち蘇氏の粗を論ずる者なりと。知らず、如何にして論じて乃ち蘇氏の精を得るかを。これ吾が弟(程洵)にありては、必ず更に説あらん。然れども、薫は則ち以爲らく道は一のみと。正ならば則ち表裏皆正なり、論ならば則ち皆表裏謬なり。あに以て精粗に折けて二致となすべけんや。これまさに道を知らざるの過なり。

吾が弟(程洵)これを読んでその文辭の工を愛して、その義理の悖るを察せず。日往き月来り、遂にこれと化すは、鮑魚の肆に入るがごとく、久しければ則ちその臭を聞せず。而れどもこの道の伝には、声色臭味の娛しむべきものなく、侈麗閑衍の辭・縦横揅闢の弁の以て世俗の耳目を眩まして、その心を益にすること有るがごときにあらず。真によく心を洗い、慮を凝めて以てその中に入り、真に力を積むこと久しくして、卓然として道体の不二を自見り、また蕪妄の邪妄の間にもまじわるあるをいれざるに非ざるに自りは、則ち豈にあえて遽然としてその平生の尊敬向慕するところの者をして、この一夫(蘇氏)の口を信ぜんや。

次に呂祖謙に与えた朱熹の蘇学批判が如何なるものか考察してみよう。呂祖謙、号東萊(一一三七—一一八一)は、《中原文献の伝あり》といわれる宋代屈指の名家の出身であり、彼は永年にわたる家学の伝統をふまえている。それは程頤の学問にやや近いが、純粹儒学というよりも、むしろ《雑学》に近く、該博な教養によって独自の学風を醸し出しているところにその特徴がある。呂祖謙は朱熹よりも七才年少であるが、彼らはよき学友として年齢にこだわることのない真摯な学問的切磋を積んだ。

呂祖謙は、文章の方面にもかなり力を用い、「宋文鑑」「古文關鍵」などを作ったり、蘇学を愛好して東坡詩の分類をしたりしているが、彼らの間に蘇学をめぐる論争が展開されたのは、現存する資料によれば、乾道六年ごろで、朱子文集に三通、呂東萊文集に二通残っている。朱熹と呂祖謙との学問的交流がいつ始まったかは定かではないが、これは恐らくその最も早い時期において闘わされた論争の一つであろう。朱熹は友人の張栻に与えた書簡の中でも、呂祖謙が蘇学に溺れているのをきびしく非難して、「渠はまた意を科挙文字に留むること久しきが爲に、蘇氏父子の波瀾に出入し、新巧の外に更に新巧を求め、心路を壞り、遂に一向蘇学を以て非となさず。左に遮り右に攔り、陽に擠け陰に助け、これ尤も人をして意に満たざらしむ。向に書を以てこれを極論すると雖も、また未だ知らず果して以て然りと爲すや否やを(文集三十一「答張敬夫」)といっているところを見ると、彼を是非とも屈服させようと躍起となつていたことがわかる。紙幅の関係で、ここにはそのうちの一つしか引用できないが、それによると、朱熹は、呂祖謙が蘇学は吾道において楊墨には相当せず、唐勒・景差の流に過ぎないといひ、あくまでも蘇氏を文人のわくに限定しようとするのに対して、氣勢するどく次のように論駁している。

向に任丈(応辰)に見ゆるに、またこの説あり。熹竊かにおもえらく、これ最もかの理を察せざる者なりと。それ文と道とは果して同じか、異なるか。もし道の外に物あれば、則ち文を作るもの、以て肆意妄言するも道に害なかるべし。惟うにそれ道の外に物なければ、則ち言いて一つも道に合わざるものあれば、則ち道において害ありとな

す。ただその害に緩急深淺あるのみ。屈宋唐景の文は、熹もとまた嘗てこれを好めり。既にして之を思えば、その言は侈と雖も、然れどもその実は悲愁放曠の二端に過ぎざるのみ。日びこの言を誦し、これと俱に化せば、あに大いに心の害をなさざらんや。ここにおいて屏絶て敢てまたみず。今左右の言によりて、また竊かにおもひに、その一時に荆楚の間に作るも、またいまだ必ずしも孟子の耳に聞えず。もし四方に流伝せしめ、学者をして家ごとに伝えて人ごとこれを誦せしむること、今の蘇氏の説のごとくならしむれば、則ち孟子たるもの亦た豈に得てやまんや。況んや今蘇氏の学は、上は性命を談じ、下は政理を述べ、その言う所のものは、ただに屈宋唐景のみにあらず。学者は始めは則ちその文を以てこれを悦び、以て一朝の利を苟み、その既に久しきに及びては則ち漸く瀟りて骨隨に入り、また自ら解免るあたわず。その人材を壊り、風俗を敗るは、蓋し少なからず。伯恭なおこれを左右んと欲す。あにそれいまだこれを思らざるや。その貶してこれを唐景の列に置くは、殆ど陽に擠けて陰にこれに予せんと欲するのみ。

乾道六年、呂祖謙は国子司業となり、科挙をめざす太学生を教えることになったが、これに対して朱熹は、呂祖謙が科挙の学にたずさわること非難しており（「答張敬夫」前掲）、また同じころ国子祭酒の芮燁（国器）に与えた二通の書簡中においても、最近の学生が蘇学に毒されて救いたい状態に陥っているのを深く憂慮し、太学からこれを占め出すよう請うている（文集卷三十七年）。蘇学の思想そのものが、必ずしも朱熹の言うほど天下の人心に害毒を与えているとは思われないが、道学による民心の統一をもくろむ彼にとつては、作文干禄を事とする当時の科挙

の学は、「陷溺人心、敗壞風俗」の最たるものと見なされるのであり、しかもその元凶が蘇学であると考えられたのであろう。その一つに次のようにいつている。

蘇氏の学は、雄深敏妙の文を以て、その傾危變幻の（風）習を煽る。故を以てその毒を被るものは、肌（に）に滲み髓（に）に洩りて自ら知らず。今日まさに拔本塞源して以て学者の聴を一にすべし。それ以て狂瀾を障りてこれを東すべきにちかきか。（然れども）まさにこれ（蘇学）を懲さんがごとくして、また遽かにその長ずる所を取るの意あり。竊かに恐る。学者はいまだ択ぶ所を知らず、一取一捨の間に、また將にこれと俱に化して以て自らかえるなからんとするを、これ則ち事を執る者の宜しく憂うる所なり。

以上見てきたように、朱熹は孝宗の乾道四五年頃、きびしい蘇学批判の書簡を集中的に先輩や知友に与えている。彼のこのような蘇学批判は執拗かつ矯激にすぎることがあるが、丁度このころは彼の学問的自立期である四十才前後であり、懸命に道統の樹立をくわだてていた最も意気盛んな時期に当たっている。周濂溪や邵雍などを道統にくみ入れるべきかどうかについて、学問傾向や出處進退の吟味識別を盛んに行っているのもこのころである。道学の鼓吹と普及のためには、異端邪説はもとより、似て非なる学説をも妥協を許さず峻別して、その相違を鮮明にすることが肝要であり、それには社会的に人心をとらえている蘇学を批判することが、最も先決の課題であったのである。そしてそれが彼の学問を程学の正統的継承者として自他ともに認識させるうえの最初の関門であり、またひいては純粹儒学による道徳の確立をもつて国家の紀綱をたてなおし、中原奪還とい

う民族の悲願を達成しようとする大いなる目的にも通じるものであった。朱熹は、当時の多くの士大夫が仏教をひそかに愛好しながら、表面では儒者を標榜しているのに極めて憤慨しているが（文集四三「答李伯謙」隆興二年）、このような儒釈折衷の学問つまり「雑学」を学ぶ者は、当時官界の大勢を占めていたの

であり、彼らはおおむね北宋の元祐時代から八十年近く経過している蘇程両派の確執を解消して、学問的にもその調和をはかろうとしていたのである。上記の汪应辰・程洵・呂祖謙などはまさにその代表者であり、彼らは范祖禹・周行己などにみられる蘇程調和論者の流れをひいて、学道は程氏、学文は蘇氏を師と仰ぎ、一方に偏向せずに博学多聞の教養の学問を主としていたのである。「君子は多く前言往行を識って以てその徳を蓄う」

（易、大畜）——このような儒教の教養主義、文化主義にのつた「雑学」（蘇学もその一種である）は、思弁的で窮屈な道学よりも、官僚の学問としては、むしろふさわしいとする一般の好尚に投じて、当時あまねく流行していたのであるが、朱熹はこれでは到底純粹儒学の眞の確立が望めないばかりでなく、次第に思想性を有する蘇学のために自己の立場すら侵蝕されて、士大夫はいつしか仏教に染り、権謀を弄び、文章に凝り、人間的に放肆になって、風俗をみだし、国家の紀綱をいよいよ紊乱させると考えたのである。従って彼はこれら多くの士大夫が支えている蘇学に対して真向うから挑戦し、学友と厳しく対決して、執拗な争辯を展開し、彼らをその精神的な麻醉状態から脱却させ、道学への完全復帰を慫慂したのである。かかる意味において、この蘇学論争は、朱熹の数ある学問的闘争の中でもこの重要な

最初の闘いであり、彼の思想形成や学説拡張にとって極めて大きな意味をもっていたと思うのである。

註

(1) 荒木敏一「宋代科場に於ける仏書の禁」（塚本博士殯祭記念仏教学論集）または「宋代科挙制度研究」三八九頁

(2) 崇寧の初めには、蘇軾や黄庭堅をまねて、時俗と異なる褒衣博帶、矮帽幅巾をつけて、時世への抵抗をしめすのが現われたこと（東萊呂紫微師友雜志）、崇寧大觀の間に、東坡の海外詩が盛んに行われ、朝廷は賞金八十万をかけてこれを禁じたが、禁が厳しくなればなるほど多く伝わり、士大夫たちは坡詩を誦することができないとさびしさをおぼえ、人はこれを不韻とよんだこと（清波雜志）、東坡の死後、蔡京が政権をとり、蘇軾の文辞墨蹟を禁じ、これを毀したが、政和年間ふとその禁が弛むと、彼の墨蹟を求むること甚だ鋭く、一時の士大夫がみな風に従ってなびいたという逸話（庚溪詩話）政和の初、蘇氏の学が禁じられていた時、湖北蕲春のある士人が、ひとり門を閉じて、十年間坡詩の注を作り、それが十分でないことを指摘されて、これを焼き、まちがつて永年努力したことを嘆じたこと（容齋隨筆）、宣和年間に東坡の文字が厳しく禁じられた時に、一士人がひそかに東坡集をたずさえて城を出ようとして、門番に捕えられ有司に送られたが、集後に「文星落処天地泣、此老已亡吾道窮……」の詩が書いてあったので、京尹はこれを義としてひそかに釈放したという逸話（梁溪漫志）、蔡京の子で権臣の蔡攸が「西清詩話」を編したが、彼は蘇黄のことを多くのせたので、天下の學術を誤ると批判されて落職されたこと（独醒雜志）、また宦官の権

力者梁師成が蘇氏の子弟をかわいがり、その文辭墨蹟の保護につとめたこと(直齋書錄解題「神宗実録考異」)など。

- (3) この書は、一般には殆ど知られていないが、「文定集」巻十五「与朱元晦」などに載っている。

- (4) 渭南文集卷二十八「跋蘇氏易伝」

- (5) 他に「蘇氏之学……又大顯於阜陵、褒崇之日、至程氏諸儒、亦莫不隨」(鶴山題跋卷六「題朱文公帖」)、「靖康而後、党禁已解、玉佩瓊瑤之辭、怒貌湯驥之書、盛行於東南、(益公題跋卷十「跋初寮先生帖」)、「高宗又喜看蘇黃輩文字云々」(朱子語類卷百)など。

- (6) 「南潤甲乙稿」卷二十一「朝散郎秘閣修撰江南西路转运副使蘇公墓詩銘」

- (7) 「揮塵前録」卷二

- (8) 蘇軾に関しては、「東坡志林」巻一「記過合浦」、与滕達道書「東坡統集卷四」、「和陶雜詩」(合註本東坡詩集卷四十三)に見られる。また蘇轍に関しては、宋の孫汝聰の「蘇穎濱年表」に「時方詔天下焚滅元祐學術、轍敎諸子録所為詩・春秋伝・古史・子贖易・書伝・論語説以待後之君子、後作易説三章及論語拾遺以補子贖之闕」といふ。

- (9) 孝宗は蘇軾の文を喜び、その集を刻して序を賜ひ、進士を策するに多く自ら陸黜す。是において蘇氏の文学、大いに世に重んぜられ、科場奉じて程式となす。淳熙中、謝廓然、程王の説を以て土を取るに母らんと請ふ。趙彥中、又疏して洛学を排す。孝宗その言をいる。後、鄭丙、陳賈は、時の相、王准の意をうけ、痛く道学の弊を陳じ、その人を排斥せんと請ふ。蓋し朱熹を指すなり。是によつて道学の名禍を世にのこす。准やめられ、周必大、熹を用いんと欲す。

林栗、熹を劾し、以て乱人の首となす。(那珂通世著、和田清訳「支那通史」下巻一三九頁〔岩波〕)

- (10) 「時上(孝宗)方崇厲蘇氏、未遑表章程氏也」(「四朝聞見録」乙集洛学)、「然天下之士、惑于異端者深、溺于文辞者衆、不讓而非之、亦指而笑之」(南潤甲乙稿卷十六)など。

- (11) 「四朝聞見録」乙集洛学。「朱子年譜」淳熙九年の項。

- (12) 荒木敏一「宋代科挙制度研究」三九五頁。那珂通世「支那通史」(岩波)下巻(一四五頁)及び「文献通考」卷三二「選舉考五」孝宗乾道十四年。

- (13) 倉田淳之助「蘇東坡詩論」(「東洋文化」復刊十三号)

- (14) 朱子語類卷一三二「汪聖錫、日以親師取友、多識前言往行為事、故其晚年、德成行尊、為世名卿」など。

- (15) 朱子語類卷一三二、「朱子文集卷三十「答汪尚書」、荒木見悟「大慧書」(筑摩書房禪の語録17)

- (16) 秋月胤繼「呂東萊」(支那学論叢「高瀬博士還暦記念」)

- (17) 倉田淳之助「施宿編東坡先生年譜の発現」(東方学報第三六)

- (18) 葉渭清「朱子与呂成公書年月考」(国立北平図書館刊第六卷第一、民国二十一年)

- (19) 張栻は朱熹への返事に、「伯恭近来僥好說話、於蘇氏父子、亦甚知其非。向來見熹、亦非助蘇氏。但習熱元祐間一等長厚之論、未肯誦言非之耳。今亦頗知此為病痛矣」(南軒文集卷二十二)と述べて、呂祖謙を弁護している。